

「自己責任」という言葉

清水 勝

新型コロナウイルスは残念ながら未だ収束の目途はたつていません。その所為かコロナに感染するのは「自己責任だ」としてみる風潮があります。

自分に対して厳しく律することは責任感が強いということでしょうが、コロナに感染した人に対して厳しく接する傾向があるのは残念です。今は元気であっても、いつ自分が感染するかわからないのですから。

こうした「自己責任」という言葉はコロナに限らず、非正規社員や貧困層の人々に対しても発せられています。即ち「正規雇用されなかったり、貧しい生活をしていたりするのは本人の責任であり、努力しなかった本人が悪い」という考え方です。

逆から見れば、「自分が成功し、恵まれた生活をしているのは、自分が努力し、能力があったからだ」と考える訳です。こうした上から見る「自己責任論」を強く持つと、他人を切り捨てる発想にもつながり、社会全体での助け合いや問題を解決しようという連帯感が失われてしまいます。

「自己責任」という言葉が言われ出したきっかけは、一九九三年十一月「経済改革研究会『規制緩和について』の中間報告書」に、「自己責任原則を重視した競争原理の徹底を図るため、規制の一層の緩和を行う」と記載されたことに依ります。

今までは消費者を保護するために、いろいろと規制してきたが、それでは経済社会構造の変革の妨げとなるから、自己責任や企業責任のもとで、自由に競い合う社会にすべきだとの意です。

一般的に認識されている「自己責任」という言葉は、「競争に負けたり、選択の失敗をしたりするのは、全部自分の所為で、誰も助けてくれない。自分のことは自分で始末をつける」というように使われます。

今や社会の格差が拡大傾向にあり、「勝ち組」と「負け組」、「富める者」と「貧しい者」に二分化しつつあります。

問題は「負け組」に再チャレンジする機会をどう提供するか、また「貧しい者」にはどう明るい将来に向かわせるかにあるように思います。